
ナギとハヤテと召喚獣

Wagtail

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナギとハヤテと召喚獣

【Nコード】

N9427Z

【作者名】

W a g t a i l

【あらすじ】

GWで遺産相続の権利を失ってしまった三千院ナギが執事の綾崎ハヤテと共に転校する先は、なんと文月学園！？

↳プロローグ↳(前書き)

できるだけ原作に沿わない形で書いていくつもりなのでキャラ崩壊が起こる可能性があります。ご注意ください。

プロローグ

五月、ゴールデンウィークが終わり緩んだ生徒達の気を、教師が必死に引き締めを図っているころ、文月学園の門の前に二人の少年少女がいた。

少年が校舎を見上げながら言った。

「いよいよですね、お嬢さま」

「そうだな、ハヤテ。で、これが新しい学校か？」

「はい、ここが文月学園です」

少年は顔を曇らせた。

「……もうしわけありません、僕のせいで遺産相続が……、そして学校まで……」

「いいんだ、それにあそこは広すぎたからな」

「ですが……」

少女は、少年の顔を覗き込んだ。

「ハヤテ、私はお前と一緒にいてくれるならどこでもいいのだ。だから……」

「はい、過去でも未来でも・・・僕がお嬢さまをお守りします」

少年は、決意を込めた表情で言い切った。

「うむー！」

少女は満面の笑みを浮かべた。

くプロローグく（後書き）

処女作です。まだ慣れなく、駄文ですが生暖かい目で見ていって下さるとうれしいです。新年から本格的に書いていく予定です。

「この時期の転校は八〇七の古〇で十分です」

b y ハヤテ

s i d e 明久

「・・・今日は転入生を紹介する」

鉄人はHRで教室にやってくるなり、そう言った。

「女子ですか、女子だよな、女子に違いないよな!？」

「男の娘でも可!!!」

みんな、突然のことですごく盛り上がってる。

当然、僕もすごく楽しみ、「女子、できれば胸が大きくてポニーテイルなら最高!!!」

「この時期にめずらしな……。それと明久、自分の性癖漏れてるぞ?」

「あ……………」

「……………明久、貧乳もステータス」

「お主達、本当に大丈夫なんじゃろうか…………?」

後ろでは美波と姫路さんがなんだか親の敵のようにお互いのある一点を見ていた。どうしたんだろう?

鉄人は周りを見てため息をすると、

「一人は男子で、もう一人は女子だ」

「「ふたり!?」「」

「じゃあ、入ってくれ」

鉄人がそういうと、扉を開けて見慣れない制服を着た二人が入ってきた。

・・・男子のほうは執事・・・?

女の子の方は、どう見ても小学生のようだけど・・・?

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ、あの制服は
・・・・・・・・・・白皇学院!?」

雄二が信じられないものを見たような顔になっている。

「雄二、知ってるの？」

「あ、ああ。まあな」

「自己紹介をしてくれ」

鉄人がみんなが落ち着くのを待って言った。

先に金髪の少女がしゃべりだした。

「三千院ナギだ。白皇学院から転校してきた。こっちにいるのが執事の……」

「綾崎ハヤテです。同じく白皇学院から転校してきました。皆さんよろしく願います。」

「ぶっちゃんは何歳ですか？」

「僕は皆さんと同じ、17歳です。」

「私は13歳だ」

「『13歳』

「――！！?!?!?!」

「お嬢さまは飛び級をしておられるので」

「日本に飛び級制度なんてあったか？」

「白皇学院は日本の法律が効かないところなので」

「というかハヤテ、あの中はもはや異次元だろ」

「……………」

「もう質問はないな。では、今日も各自しっかりと勉学に励むように」

鉄人が出て行くと二人、いや三千院さんの方に質問攻めが始まった。

「ねえ、今度お茶しない？」

「遊園地とかどう？」

「賢いお兄さんが大人の遊びを……………」

「えっと、あの…………ハ、ハヤテ……………!!!!」

彼女が叫んだ瞬間、執事の少年が人だかりに飛び込み、彼女にしゃべりかけていたクラスメイトは一瞬で空をまった。

「……無事ですか、お嬢さま？」

「うん！ありがとう、ハヤテ」

「皆さん、ボクのお嬢さまに手を出すならそれなりの覚悟をしておいてくださいね？」

「あー、……ちょっといいか？」

「はい、なんででしょう？」

「俺は坂本雄二、一応Fクラスの代表をしている」

「つまり委員長みたいなものでしょうか？」

「あゝ、泉のやつみたいなの……」

「……お前たち、試召戦争を知らないのか……？」

「なんなのだ、それは？」

「僕たちは急遽、転校してきたのであまりこの学校に詳しくないんですよ」

「そっか、なら……」

～説明中～

「なんだ、この学校にはそんな面白そうなものがあるのか!?!」

「だろ？やってみたいとは思わないか？」

「やる！..！」

「お嬢さまがおやりになるといふのなら僕も。それに、その・・・この設備はあまりにもひどすぎると思いますし

ね

周りには、みかん箱が転がっている。

僕らがこの前の試召戦争で負け、机がちゃぶ台からみかん箱になってしまったからだ。

「まあ、結局俺たちは負けて3ヶ月間、宣戦布告ができなくなっているところだけだな」

「おいつ..！」

「ではなぜ、その話を僕たちに？」

「この学校にいる以上、必ず関わってくるものだからな。」

「へえ、そうなんですか。」

「あとそれと、幼女ナンパ組は置いといて、ほかのメンバーを紹介しておこうと思う。」

雄二は辺りを見回して、

「明久、秀吉、ムッツリーニ、島田、姫路！」

僕たちを呼んだ。

「全員自己紹介を頼む。」

「この時期の転校は八〇七の古〇で十分です」

b y ハヤテ（後書き）

どこで区切れればいいのかわかりませんでした・・・感想お待ちしております！！

「自己紹介は長いと嫌われる」 b y 明久

「全員自己紹介を頼む」

雄二はみんなを集めるとそう言った。

「もとよりそのつもりじゃ」

「ウチもそのつもりよ」

「………金髪少女、よろしく」

「まずはフシからいじょうかの？」

「.....」

「.....」

「ムツツリーニ、多分あの人の山に入っちゃうよ？」

「.....需要がある」

「ムツツリーニ.....まさか.....？」

「ワシは木下秀吉。演劇部に所属してある」

「気づいておると思うが、ワシは男じゃ。一年間よろしく頼むぞい」

「へえ……………で、ええ!？」

「……………つまり男の娘というわけか？」

「普通に男じゃ!！」

(……………ハヤテ、世界は広いな……………)

(どうなさいました、お嬢さま?)

(ハヤテより女装が似合いそうな奴、始めてみた……。今度着せて比べてみよう)

(僕に女装させるのはやめて下さい……)

「……………土屋康太」

「趣味は……ビデオ撮影、特技は……録音。よろしく」

「よ、よろしく」

「よ、よろしくお願いします」

（ハヤテ、あの・・・ポケットから見えてるもの、どっと思っっ）

（あれは・・・）

（うん・・・）

（盗聴器・・・）

(美希の奴も使ってないぞ・・・?)

「次は私ですね。姫路瑞希です。趣味は料理、二人ともよろしくお願ひします」

「よろしく」

「よろしくお願ひします」

(なぜか男子達が料理と聞いた瞬間、震えた気がするのだが……)

(ははは……。気のせいですよ、お嬢さま)

「次はウチね、ウチは島田美波。海外育ちだったから日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です」

「あ、でも英語も苦手、育ちはドイツだったから」

「ふむ、そうか……。B i t t e k ? m m e r d i c h d

「arum(よろしく)」

「K?nnen Sie Deutsch sprechen!?
(あなた話せるの!?) Dies ist in Ordnung
gg(ごきげんよう)」

「おい、三千院はドイツ語が話せるのか?」

「はい、お嬢さまは海外にいた期間が長かったので。たしか8カ国
語話せたと思います」

「・・・お前は?」

「僕はとても・・・、白皇では試験の問題自体英語で書かれていますので、英語はそこそこできますが・・・」

「それも十分すごいと思うのじゃが・・・」

「・・・で、趣味はアキを殴ること!」

「美波、僕はサンドバックじゃないよ!？」

「よろしくね、二人とも」

「よ、よろしく」

「よろしくお願いします」

「じゃあ、最後は僕だね。僕は吉井明久。趣味はゲームかな？ それなりに得意だよ」

「ほう、では今度私と勝負しないか？」

「い、い、い」

「しかし、実はテレビが引越して古いタイプになってしまっていてできないソフトがあるんだが・・・」

「じゃあ、うちに今度来る？」

「いいのか!？」

「もちろん!! Wiiやら、PS3、X-BOXとかも一応集めてあるよ?」

生活費をすべてゲームに使っているから!

「おお!」

「今度、絶対行くのだ！」

「……………明久が幼女を家に連れ込もうとしてる……………」

「ムツツリーニ、変なこといわないで！」

まったくそんな……。これじゃ僕がロリコンの危ない人みたいじゃないかつ！

「じゃあ、今度みんなで行くというのはどうでしょう？」

「姫路さん？」

「私もその・・・吉井君の家見てみたいです・・・（本当に連れ込ませるわけにもいきませんし・・・）」

「うん、大歓迎だよ！」

一人暮らしだし、人がくるのはとてもうれしいことだ。

「・・・それはそうと明久、あれを言い忘れてないか？」

「・・・あれってまさか・・・？」

「????？」

とりあえず、知らないフリをしておこう・・・。

「実は明久は観察「ちょっと待った——————!!」・・・
観察処分者なんだ」

せっかくだから伏せておこうと思ったのに・・・。

「観察処分者？」

「なんなのだ？ それは」

「簡単に言えば、教師の雑用係だ」

「その代わりとってはなんだが、召喚獣が物に触れられるようになる」

「おおっ！..!」

「召喚獣の力は人間の比じゃない。その力を使ってする仕事もあるからな」

「ほう.....で、なぜそれをさっき隠そうとしたのだ?」

「.....雄二、さすがにそこまでは言わないよね?」

「いったい何をしたらそうなるんだ……？」

「全教科で欠点でも取ったんでしょっか？」

「明久は持ち物検査で取られたものや、教師の私物を職員室から盗み出し、まとめて売りさばいた」

「雄二、それだと僕が悪者みたいじゃないか!？」

「実際、そうだろ!？」

「く、でも雄二も作戦に参加した共犯者じゃないか!？」

「そうだが俺は教師の私物なんて売ってねえ！ お前は普通に犯罪者だろうが!！」

「あ、あれには色々事情があったんだよ・・・」

「まあいい・・・、とにかく全員自己紹介は終わったな？」

「二人とも、これから先の試召戦争では力を借りると思っ、よろしく」

「じゃあじゃあ」

「よろしくお願いします」

「さて、そろそろ時間だ。授業始まるぞ！」

――放課後――

「いや、皆さんずいぶんと個性的な人たちですね、お嬢さま？」

「そうだな、だが・・・」

「はい、お嬢さま？」

「学校が楽しくなりそうなのだ！」

「お、お嬢さま!？」

「と、言っても行くのは多くて週に一度だがな！」

「お嬢さま……、それでは何も変わりませんよ——」

「自己紹介は長いと嫌われる」 by 明久（後書き）

連日投稿なんて不可能と悟りました。

感想等、お待ちしています!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9427z/>

ナギとハヤテと召喚獣

2012年1月4日10時53分発行